

近代看護：現代看護の歴史的あゆみからみた看護の専門性確立と質保証に関する研究

著者	野地 有子
雑誌名	学長特別研究費研究報告書
巻	17
ページ	45-50
発行年	2006-06
URL	http://hdl.handle.net/10631/854

近代看護～現代看護の歴史的あゆみからみた
看護の専門性確立と質保証に関する研究

野 地 有 子

The Study on Nursing Professionals and Quality Assurances
from the Modern and the Contemporary Nursing Course of History

Ariko Noji, RN. PhD

キーワード：看護の専門性 (nursing professionals), 質保証 (quality assurances),
近代～現代看護 (the modern and the contemporary nursing),
歴史的歩み (the course of history)

Abstract

The first year to study nursing professionals and quality assurances from the modern and the contemporary nursing course of history, four nursing professors, two were Japanese and two were American, participated and shared their experiences and perspectives. Grounded theory approach was introduced and the data was not saturated yet at the first year. The content of the interviews' outcomes were the phase of Japanese nursing theory, quality assurance of health and nursing care, quality assurance system for both nursing education and practice, and the standardization history of community health nursing in the states. The results showed five points as follows and these future agendas would be applied to CNS education in our new graduate course.

- Minimum standards were combined for quality assurances in nursing education.
- A standard of the nursing internship was one of the future agenda.
- Nursing schools collected some data for quality assurances, which was not analyzed by outcome perspectives.
- Peer support and mentor were essential for nursing professionals.
- Nursing professionals need to correspond with the community needs.

Focus group interview and Delphi method would be introduced in the next stage of the study.

要旨

近代看護～現代看護の歴史的あゆみからみた、看護の専門性確立と質保証に関する研究の基盤づくりとして、初年度に4名（日本人看護教育者2名、米国人看護教育者2名）を対象

に、インタビューおよび資料の検討を行なった。グラウンデッド・セオリー・アプローチにより、初年度に統合的な概念形成にまで至っていないが、選択的サンプリングへの示唆を得た。今回収集できたデータは20世紀後半から現代に至るものであった。インタビュー結果にみられた内容は4点あげられ、日本の看護論の位相、医療・看護サービスの質管理、看護の質保証のシステム、そして米国における地域看護実践の標準化であった。要点は、次のとおりであった。

- ・ ミニマム・スタンダードの組み合わせが行われており、基準ごとの特徴である長所と欠点が吟味されていた。
- ・ インターンシップ（実習）の基準づくりが課題であった。
- ・ 看護教育に関する大学毎のデータはあるが、アウトカムに視点を置いた分析・評価が今後の課題である。
- ・ 看護職および看護教員のピアサポート、メンターが重要である。
- ・ 地域ニーズとの整合性が求められている。

本学では、大学院修士課程において専門看護師（CNS）の教育もスタートしており、特に実習における基準づくりなどは、本研究から多くの示唆を得た。歴史的歩みからみた、看護の専門性の確立と質保証に関する研究を継続し、その成果を看護教育の実践に活かしていきたい。

I. はじめに

近代日本看護史において、上越地域・高田における看護教育とその実践の歴史は、近代看護の萌芽期にその足跡を残しており、その後の現代看護のあゆみにおいても、先進的な試みがなされてきた。このような真摯の気性に富んだ先人らの築いた歴史のうえに本学が拓かれており（亀山, 1990；亀山, 1992）、平成17年度には第1回生が卒業し、平成18年度には大学院が開設され、さらなる歩みを進めているところである。本学は、地域社会に根ざした看護大学として、新潟県および上越市地域のヘルスケアニーズに貢献することが特に期待されており、今後の発展の礎を築くためにも、いかに看護の専門性の確立と質保証への努力がなされてきたか、当地を含めて国内外の看護史から学び整理することから今後の指針としたい。また、わが国における看護系大学の発展の時期にあつて、厚生労働省による看護師需給見通しによっても、わが国は“看護の質”の時代に入ったといわれる今日、看護の専門性の確立と質保証への努力の足跡を歴史的に振り返ることは時期を得ているといえよう。

看護歴史研究では、女性と職業や、戦争、医師との関係性や個人史（亀山, 1985；土曜会歴史部会, 1973；看護史研究会, 1989；雪永, 1970；大森, 2003；佐藤, 2000）などの視点からまとめられたものが多くみられるが、看護の専門性の確立と質保証の視点から系統的にまとめられた研究は少ない。

そこで、本研究の目的は、

- 1) わが国における近代看護～現代看護のあゆみを、特に看護の専門性の確立と質保の視点から、インタビューおよび資料整理により検討する。
- 2) わが国の近代～現代看護の歴史には、アメリカ看護の影響が大きい（Kalisch, 2004；

Takahashi, 2004). そこで、看護の専門性と質保証を中心に、アメリカにおける取り組みをインタビューおよび資料整理により検討する。

3) 上記 1) および 2) より、本学における学部と大学院の看護教育における示唆を得る。

本研究は基礎的研究として位置づけられ、関係者への聴き取りおよび資料収集から始められる。

II. 方法

対象は、日本および米国の看護歴史研究者、看護教育者とした。入手可能な歴史資料および文献をあわせて分析対象とした。

研究方法は、サンプリングを含めて質的研究方法のグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。インタビューは、録音のうえ逐語録を作成し、ワーキングシートに起こして概念生成を行った。スーパーバイスとして、看護歴史研究者および看護の専門性の確立と質保証の研究者からアドバイス得ながら、内容の妥当性と信頼性を高め、インタビュー参加者に結果をフィードバックすることにより、データの精製化を図った。資料および文献検討は、インタビューの中から得られた示唆も活用し既存資料などから行った(高橋,2004)。

倫理的配慮では、インタビューに先立ち、研究目的と方法に関する本研究の概要および倫理的配慮について、インフォームド・コンセント様式(和文と英文)を用いて、文書と口頭で説明した。本研究への参加の同意について、文書にて承諾書を得た。倫理的配慮の内容には、テープ録音されたインタビューデータは、研究目的に使用すること、研究結果は個人史を作成するのではなく個人が特定されない形で発表されること、逐語録に目を通した後や研究途中においてデータを研究として使用することを拒否できること、拒否や途中でやめることによる不利益を受けないことが含まれた。

III. 結果および考察

対象は4名であり、日本人看護教育者2名(女性2名, 50~60歳代)および米国人看護教育者2名(男性1名, 女性1名, 50~60歳代)であった。インタビューは、インタビュー参加者の希望された場所で行い、一人60分~90分であった。本研究はグラウンデッド・セオリー・アプローチによる基礎的研究であるため、研究結果として初年度には概念形成のためのサチュレーションに至っていないため、インタビューおよび資料から得られた内容を報告する。その内容は、日本の看護論の位相、医療看護サービスの質管理、看護の質保証のシステム、および米国における地域看護実践の標準化である。

1. 日本の看護論の位相

本研究テーマに接近するためには、世界的歴史を踏まえた日本における看護思想の時代的流れを掴むことがあげられた。20世紀の後半にみられる日本の看護論(広範な看護理論)には、

- ・ 死への看護論(我一汝の関係と呼ばれる感性、看護師の人格)
- ・ 科学的看護論(科学と宗教)

- ・ 人間性の看護論（人間性を約束する看護師の役割）
- ・ 社会の看護論（社会の制約との闘い）

があげられた。

看護の本質の確認（正確な看護技術とケアのこころ）、システム社会における看護の専門性の模索の視点から、日本の看護論がこの半世紀の間に、看護の専門性確立と質保証にどのように関係してきたかについて整理することが、ひとつのアプローチとなる可能性があると考えられる。

2. 医療・看護サービスの質管理

医療・看護サービスの質管理に関する研究として、近年、税金を財源とする全国的な公的医療サービスと国民保険制度を導入したノルウェー例があげられた（李，2006）。ノルウェーにおける医療・看護サービスの質の概念分類は、患者にとっての質、病院としての質、国や国民にとっての質の3つに分けられている。質の構成要素には、安全（傷害の予防）、効果（科学的根拠によるサービス）、患者中心（敬意をもった患者に応じたサービス）、適時性（無駄の削減）、公正（質にバラつきが無いケア）があげられた。これらを管理していくには、

- ・ 信頼に基づく専門家の自律
- ・ 効果的な質管理尺度の開発・評価

の必要性が指摘されている。

看護の専門性確立と質保証には、看護職の自律とともに、看護の質を評価する質管理尺度とそれによる評価の必要性がある。日本では医療・看護サービスの質管理の体制がまだ確立していないということであるが、今後のインタビューにおいて、わが国における歴史的な個々の事例による取り組みを検討することも必要性があると考えられる。

3. 看護の質保証のシステム

米国人のインタビュー参加者は2名とも、システムによるアプローチの重要性を強調した。その背景には、Structure・Process・Outcome（構造・経過・結果）の思考枠組みのあることが考えられた。米国における看護の質保証のシステムの例は、表1に示す通りである。

教育には、学生、教員、管理・環境の3側面から取り組まれていた。学生では、特に入学試験を中心として、社会的要請から多様な入学者とそのためのプログラムを用意していることより、入学選抜により適切な人材を得ることに努力されていた。教員では、教員評価に加えてメンターやピアサポートなどによる相互支援の努力があげられた。管理・環境では、大学と地域や社会との関係に重点がおかれていた。教育機関評価には、全米にお

表1. 看護の質保証のシステムの例

<ul style="list-style-type: none"> ・ 教育 <ul style="list-style-type: none"> 学生 教員 管理・環境 教育機関評価 ・ 実践 <ul style="list-style-type: none"> 病院（保健医療機関）評価

いて数種類あげられ、各大学では複数を採用していた。その理由は、各評価基準には特徴があるので大学毎に複数を活用しているとのことであった。また、大学側がデータを収集してきたが、それらを使った十分な評価、すなわちアウトカムに視点を置いた分析・評価をしてこなかった点が反省にあげられた。

実習に関しては、インターンシップの標準づくりが課題としてあげられた。

実践における看護の質保証のシステムには、JCAHO (Joint Commission on Accreditation of Healthcare Organizations) による第3者評価があげられた。JCAHOで2005年より新しく取り組まれているのは、医療機関における文化的視点の重視ということであった。これまでの評価視点には、あまりあがっていなかった項目についての検討が進められている。日本の病院機能評価機構におけるサーベイでは、この点については少なくともカバーされているが、サーベイヤーが文化的視点のトレーニングを十分されているかについては、米国と同様に十分とはいえない状況であるとみられる。

4. 米国における地域看護実践の標準化

看護の専門性の確立と質保証には、看護実践の標準化もひとつの柱と考えられる。米国の地域看護実践の標準化を歴史的史実として概要を整理すると表2の通りである。

表2. 米国における地域看護実践の標準化

訪問看護施設による全国統一ロゴの作成 訪問看護季刊誌による標準化ケアの普及 全米公衆衛生看護協会の設立 (1912) 教育課程の評価 (基準と手順) の認定 (1929) 全米看護連盟 (NLN) に合併 (1952)

IV. まとめ

近代看護～現代看護の歴史的あゆみからみた、看護の専門性確立と質保証に関する研究の基盤づくりとして、初年度に4名（日本人看護教育者2名、米国人看護教育者2名）を対象に、インタビューおよび資料の検討を行なった。グラウンデッド・セオリー・アプローチにより、初年度に概念形成にまで至っていないが、選択的サンプリングへの示唆を得た。次年度には、インタビューの継続に加えて、フォーカスグループ・インタビューあるいは、デルファイ法を併用したアプローチも有効と考えられる。また、当初予定していた歴史研究者の急逝によりインタビューが実施できなかったことより、今回収集できたデータは20世紀後半から現代に至るものであった。今回のインタビュー結果にみられた要点は、次のとおりであった。

- ・ ミニマム・スタンダードの組み合わせが行われており、基準ごとの特徴である長所と欠点

が吟味されていた。

- ・ インターンシップ（実習）の基準づくりが課題であった。
- ・ 看護教育に関する大学毎のデータはあるが、アウトカムに視点を置いた分析・評価が今後の課題である。
- ・ 看護職および看護教員のピアサポート，メンターが重要である。
- ・ 地域ニーズとの整合性が求められている。

本学では，大学院修士課程において専門看護師（CNS）の教育もスタートしており，特に実習における基準づくりなどは，本研究から多くの示唆を得た。歴史的歩みからみた，看護の専門性の確立と質保証に関する研究を継続し，その成果を看護教育の実践に活かしていきたい。

参考文献

- 大森文子（2003）：看護の歴史，日本看護協会出版会。
- 亀山美知子（1985）：近代日本看護史，ドメス出版。
- 亀山美知子（1990）：女たちの約束 MT ツルーと日本最初の看護婦学校，人文書院。
- 亀山美知子（1992）：大風のように生きて 日本最初の看護婦大関和物語，ドメス出版。
- Kalisch, PA., Kalisch BJ.(2004): American Nursing History (4th ed.), Lippincott.
- 看護史研究会（1989）：看護学生のための日本看護史，医学書院。
- 佐藤直子（2000）：日本の近代化に大きな役割を果たした外国人—伝道師 Marua T. True—，聖学院大学卒業論文。
- Takahashi, A.(2004): The Development of the Japanese Nursing Profession – Adopting and adapting western influences, Routledge Curzon.
- 高橋みや子（2004）：日本の看護歴史関連史料の専門的基盤整備のための調査研究，平成 14・15 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（1））研究成果報告書。
- 土曜会歴史部会（1973）：日本近代看護の夜明け，医学書院。
- 雪永政枝（1970）：看護史の人びと，メヂカルフレンド社。
- 李延秀，菅田勝也，綿貫成明他（2006）：ノルウェーにおける医療・看護サービスの質管理データベース，看護管理，16（1），72-77。